

4. 本明川で起こりうる災害

近年は集中豪雨が多発しており、年々増加する傾向にあります。

本明川は短く勾配が急であるため一気に川を流れ下ってしまいます。

そして勾配が緩やかになった市街地付近で急激に水位が上昇し、洪水が発生することもあります。

昭和32年の諫早大水害以降も大きな洪水が何度も発生しており、集中豪雨の際には十分に注意が必要になります。

また、本明川はその延長が短く、市街地を経て一気に有明海へ流れ出てしまうため、水を留めることができず、雨が降らないと渇水となる恐れもあります。渇水が起こると河川に棲む生物に影響が及んでしまいます。

諫早市街地は拡大しており、想定氾濫区域内の人口が増加しているため、洪水や渇水を防ぐために本明川の更なる治水対策を急ぐ必要があります。

詳細については、パネルをご覧ください。

近年は「集中豪雨」が多発しています。

■全国 [アメダス] 1時間降水量50mm以上の年間発生回数

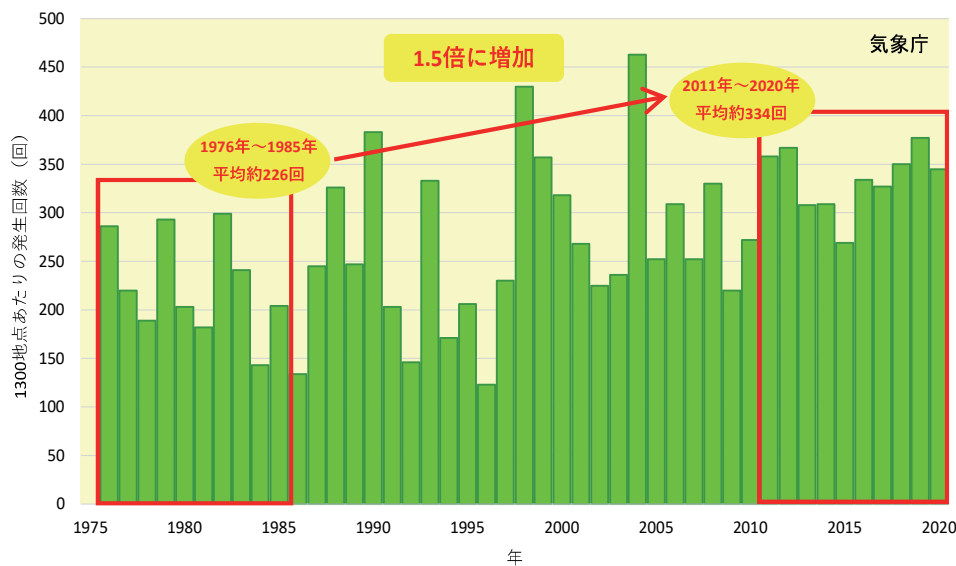


図 全国の1時間降水量50mm以上の年間発生回数の経年変化（1976年～2020年）

・最近10年間（2010～2020年）の平均年間発生回数（約334回）は、統計期間の最初の10年間（1976～1985年）の平均年間発生回数（約226回）と比べて約1.5倍に増加しています。

■全国 [51地点平均] 日降水量100mm以上の年間日数

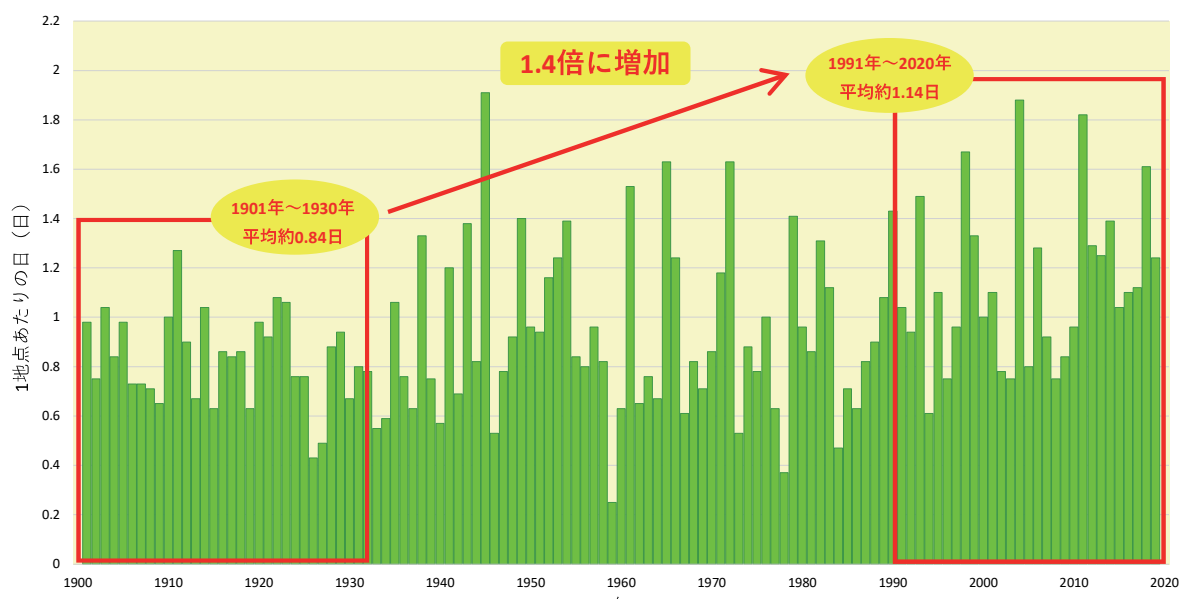


図 全国の日降水量100mm以上の年間日数の経年変化（1901年～2020年）

・最近30年間（1990～2020年）の平均年間日数（約1.14日）は、統計期間の最初の30年間（1901～1930年）の平均年間日数（約0.84日）と比べて約1.4倍に増加しています

昭和32年の諫早大水害以降も、 大きな洪水が発生しています！

■昭和32年以降の主な水害

発生 年月日	発生 原因	水文状況		被害状況
		実績流量 (裏山)	日雨量 (裏山上流域)	
昭和32年 7月25日 (諫早大水害)	梅雨前線	約1,070m ³ /s (推定値)	約620mm	死者：464名、行方不明者：45名 (死者・行方不明者：630 [※] 名) 負傷者：1,476名 家屋全壊・流出：727戸、家屋半壊：575戸 床上浸水：2,734戸、床下浸水：675戸
昭和37年 7月7日	梅雨前線	約730m ³ /s	約250mm	負傷者：14名 家屋全壊：60戸、家屋半壊：25戸 床上浸水：2,262戸、床下浸水：8,058戸
昭和57年 7月22～24日 (長崎大水害)	梅雨前線	約690m ³ /s	約470mm	床上浸水(外水)：118戸 床上浸水(内水)：494戸 床下浸水(外水)：168戸 床下浸水(内水)：713戸
平成11年 7月23日	熱帯 低気圧	約720m ³ /s	約290mm	床上浸水(内水)：397戸 床下浸水(内水)：227戸
平成23年 8月23日	前 線	約700m ³ /s	約200mm	床上浸水(内水)：5戸 [※] 床下浸水(内水)：24戸 [※]

※市町村合併後の諫早市の被害状況

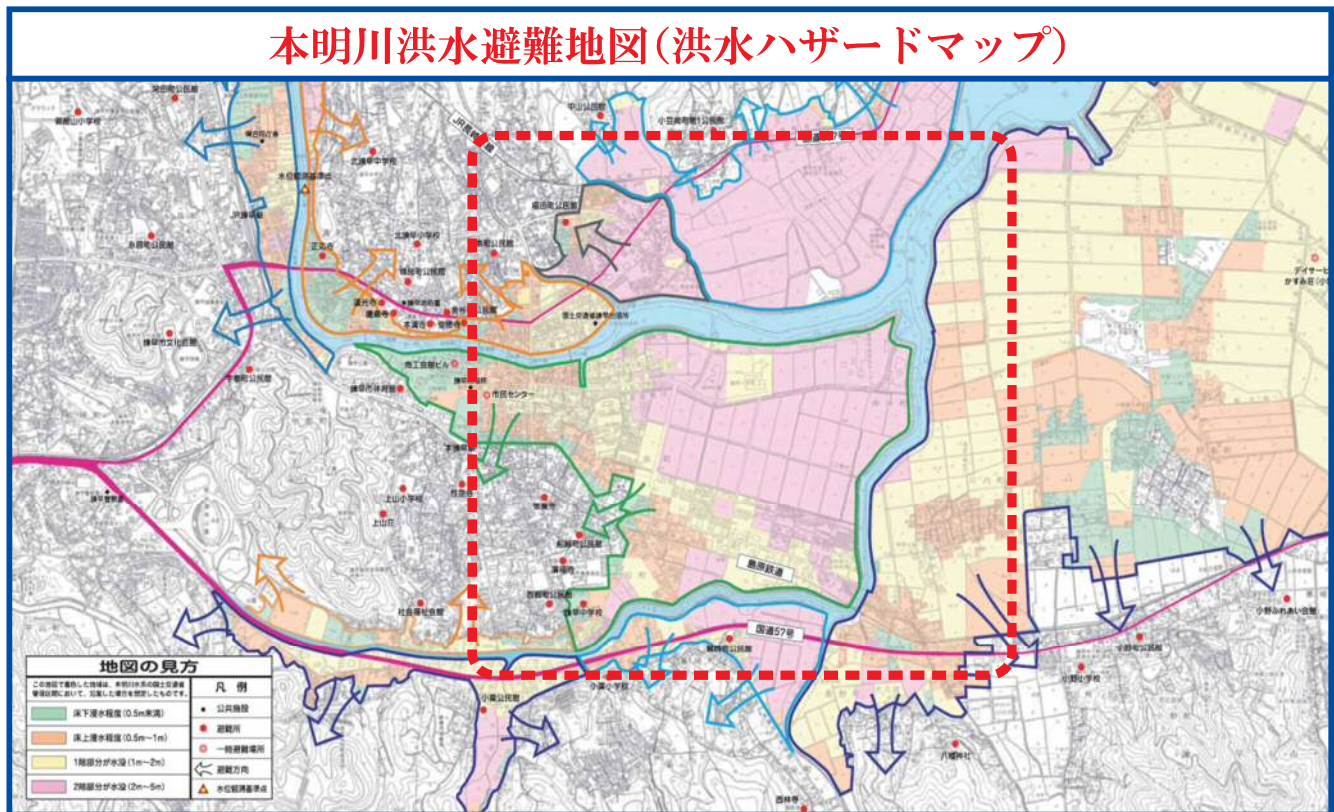
昭和32年の諫早大水害以降も、 大きな洪水が発生しています！

平成11年には本明川の裏山水位観測所で **1時間に
約2m水位が上昇し、旧諫早市全域（約3万4千世帯、
9万4千人）に避難勧告** が出されました。

■平成11年7月23日出水時の浸水の様子



諫早市街地は拡大し、想定氾濫区域内の人口が増加しています！



■昭和50年代



■平成20年代



黄色枠内の建物が
増加していることが分かります

想定氾濫区域内の人口が増加しているため、
本明川の治水対策を急ぐ必要があります。

本明川は、洪水氾濫の危険性だけでなく、渇水の恐れもあります。

■平成6年7月の渇水の様子



渇水は農作物被害だけでなく、
川に棲む生物にも大きな影響を及ぼします。



■これまでの主な渇水

発生年	浸水被害の状況
昭和35年	深刻な県下の水不足、農作物の被害が18億円。
昭和41年	干ばつにより、諫早市の水田面積の半分にあたる約1,100haに被害。県下の水稻被害は5億3,300万円。
昭和42年 (長崎渇水)	県下の農作物の被害は戦後最大となり、水稻は作付面積の76%が被害を受け、被害額は40億円。
昭和57年	諫早市長田地区で、田植えが遅れる等の被害が出たため、消防団の緊急出動により支援水を送る。
平成6年 (列島渇水)	本明川では、アユやハヤの大量死が続いたため、諫早市が魚を救出。諫早市は1,165haの作付面積のうち、176haで水不足が発生。諫早市における農作物の被害は約1億5千万円。